

# 全科協ニュース

1981年3月1日発行  
(通巻第58号)

全国科学博物館協議会

東京都台東区上野公園  
国立科学博物館内

☎ 110

Tel. 03-822-0111(大代)

おもな内容：◇北米大陸の科学博物館に見る博物館の流れ ソシアルダイナミックス研究所 端山貢明 ◇NHK放送博物館開館25周年特別記念展 ◇特別展 天文・宇宙のコレクション 生駒山宇宙科学館  
◇太陽スペクトルの実物展示 五島プラネタリウム ◇リニアモーターカー ML500 交通科学館  
◇科学展示品 エネルギーのうつりかわり 室蘭市青少年科学館 ◇伊丹市立博物館

## 〔海外の博物館〕

### 北米大陸の科学博物館に見る博物館の流れ

端 山 貢 明

このエッセイは、アメリカ合衆国及びカナダにある主要な理工系博物館についての概観を行おうとするものであるが、各博物館の内容についてはすでに多く紹介されており周知のことと思われるので、ここでは博物館全体の背後にある質の変遷の流れをとらえてみたい。

博物館は社会構造や社会の質の変動に伴って変貌してきたが、今日までのその歴史全体には次のような流れを考えることができる。

1. コレクション (古典的博物館)
2. 技術の体系的理解  
(博覧会等大きなイベント付随型博物館)
3. サイエンスセンター
4. 社会的コミュニケーションセンター

以下この流れの中でそれぞれ博物館を考えてみよう。

#### 1. 古典的博物館

博物館の発生はコレクションにある。私的なもの、組織によるものを問わず、その始まりは趣味、研究、投機など何らかの目的によって集積したものや資料をもとにそれを公開し展覧に供するところから始まったものである。大英博物館、ドイツ博物館、ルーブル博物館などの発生はこの形をとっており、これらは古典的博物館の代表的なものである。これらの博物館の特徴は、コレクションという意味からも実物の展示が多く、その強い説得力により情報源としての機能を保ち続けている。

これらの実物は一般によく管理されており、ドイツ博物館の場合に見られるようにそれらの多くは実際に運転できるように整備されており、機械や技術を理解しやすくする力を発揮している。これらは実物の説得力により

解説などを含んだいわゆる展示技術にあまり依存する必要がなく、実物が何らかの分類によって見やすく陳列されていることですでに充分であり、そこにある技術といえは主に配置の技術であるということができる。

#### 2. 博覧会等大きなイベント付随型博物館

シカゴ科学産業博物館は、1933年から34年にかけてシカゴで開かれた「新しい世紀博覧会」において一部開館し、1940年に全館が開館した。また、1937年パリ万国博覧会において開館したシャイヨー宮の4つの博物館、1962年シアトル万国博覧会の施設として開館したパシフィック・サイエンスセンターなど、万国博覧会の開催と関連して開設された博物館がある。

これらは古典的博物館の実物主義に対し、種々のしかけや展示技術を動員することにより、単なる技術の成果の誇示ではなく、その背後にある構造とともに体系的に理解することのできるような機能を目指しており、社会教育機関としての意味をより強くもつようになったものである。それはすでにコレクションの展示ではなく、博物館自身にも展示にも一つの思想があり、ある概念に基づいて活動が方向づけられているのである。

また、シカゴ科学産業博物館は企業出展の形を導入しており、各企業がそれぞれの関係分野について熱心な展示を行っている。

パシフィック・サイエンスセンターは、このような一連の博物館の最後にあたるものと考えられる。ミノル・ヤマサキの設計した建築群と新しい展示技術、参加性への配慮、地域センターとしての機能も含むなど、次の時期の博物館への接点となるものである。

スミソニアン研究所の一連の博物館群は1の性格と2の博物館のもつ社会教育機関としての性格および国内外に関するモニュメントとしての性格を兼ね備えたものである。国立歴史技術博物館(1964)では1858年以来収集された実物のもつ説得力と展示技術が「分かりやすい古典的博物館」の性格を現しているのが見られ、また航空宇宙博物館(1976)ではリリエントールのハンググライダー、ライト兄弟のフライアー以来の飛行機の歴史をたどる実物(第2次大戦中の飛行機の中にはゼロ戦も含まれている)及びエクスプローラI以来の宇宙開発上の実物・実物大模型が数多く懸架展示され、そのありさまは壮観である。これらの展示物と同時にプラネタリウムを利用したショーなどの実演もあり、このような人々を巻きこむ励起化技術と見事な展示技術によって非常に魅力的な空間を作りあげている。この2つの博物館は性格としても機能としても1, 2の流れの現代における完成または集大成といえることができる。

60年代は、技術革新と呼ばれ第2次世界大戦後目ざましく発展した新しい科学技術、産業技術が社会的にいろいろな側面で効果を現し始めた時期であり、科学技術への楽天的な時期が大きくなり、また興味もとみに高くなっていた時期であった。

これらの博物館は、このような社会的意識に対応した記念碑となったのである。

### 3. サイエンスセンター

60年代も終わりに近づくと、科学技術に対する社会意識の成熟と環境の変化により科学博物館に対する社会的要求も変わり始め、これに対応するいろいろな新しい試みが行われるようになった。

60年代は科学技術と同時に経済的にも爆発的な成長の時期であった。この時期の前衛芸術、実験的表現技術の大きな特徴は、「非決定性」と「参加性」であった。これらは、その後社会の中で着実に実現され、具体化されていく新しい社会の質の予兆とみるべきであり、情報の

受け渡しにもこのような傾向が強く現れるのである。

カナダ連邦100年にあたる1967年に企画され、1969年に開館したオンタリオ・サイエンスセンターは、このような方向性を的確にとらえ、かつ成功した一例である。

参加性の萌芽は、パシフィック・サイエンスセンター、フィリップス・エボリュオン科学館(オランダ・アイントホーフエン)等の展示の概念にも明らかに現れているのであるが、オンタリオ・サイエンスセンターの場合には、これを更に拡大し、その参加性を容易にするための展示技術の開発とその実施を可能にするバックアップ体制の確立を行うことによって実現したものである。

Please touch、とパンフレットにも記されているように、多くの展示は入館者がさわることを前提としており、それによって起こる故障は予定された当然の事柄としてメンテナンス体制が組まれている。

参加性を重視し、また、より広い対象に対応することを目的とするためインタラクティビティとともに理解の容易さ、興味の喚起に重点が置かれており、このため展示システムはまず人の目を引き、また行ったことの結果が短いサイクルで入館者に返され、その行動と結果の対応関係が単純に明快に分かるように仕組みられている。

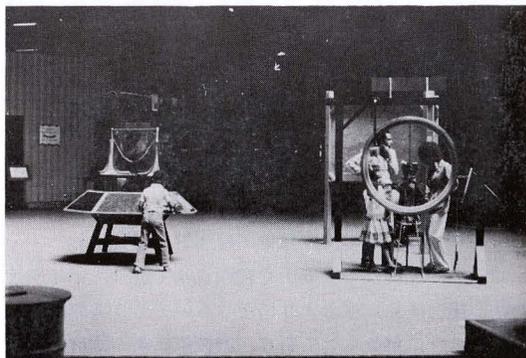
このようにオンタリオ・サイエンスセンターの展示の底流をなす概念は極めて大きな効果をあげ、世界各地の博物館に同センターの展示と同類の展示が多く見られるようになり、70年代のこの種の施設のひとつの指標となるに至った。

また、大型トレーラーに同センターにあるものと同種の展示システムを積み、各地を巡回し移動展を開くサイエンス・サーカスにも、この概念は端的に現れている。

同じ年に開館し、ほぼ同じ参加性による理解を目標とした博物館に、サンフランシスコ市の「エクスプロトリアム」がある。同じ概念による施設とはいいいながら、この博物館はオンタリオ・サイエンスセンターとも全く違う外観で、それはすでに博物館と呼ぶことのできない存在となっている。



スミソニアン航空宇宙博物館



エクスプロトリアム

展示システムは、オンタリオ・サイエンスセンターと同様、内部のワークショップで作られているが、エクスプロアトリウムの場合は展示品の外観は大変見栄えも悪く、その配置も一見雑然としている。第一印象は汚い大きな倉庫の中に、作りかけのシステムが雑然と置いてあるように見えるが、すべて入館者の操作によって動くことを前提としているこれらシステムのインタラクティブ性は抜群であり、一見乱雑に見える配置もすべての入館者が自由にあらゆる方向に移動することを可能とし、アクセスする側の主体的な情報との交流を高くさせる効果を持っている。

この博物館の性格は、発案者であるオッペンハイマー博士の思想の現れであるが、整然としたオンタリオ・サイエンスセンターが残している従来の博物館的な性格に比べ、より新しいひとつのプレイクスルーポイントを作ること成功したものと考えられる。

サイエンスセンター型の博物館は、70年代にひとつの潮流となり、各地に類似の施設もでき、また、既存の博物館もサイエンスセンター型の展示システムを設置し、多くの博物館はこの時潮にやや似た傾向の外観をもつようになった。ただ新しいセンターの概念が本質的に理解され、具体化されている例はあまり多くなく、いたずらに外観ばかり魅力的な展示が多くなった。

#### 4. 社会的コミュニケーションセンター

70年代の後半から、科学技術の情報に対する要求の形態が再び変わり始め、これに対応する新しい方式の模索が始められるようになった。今年開館しようとしている

##### 〔特別展〕

### NHK放送博物館開館25周年特別記念展

NHK放送博物館が放送開始30周年を記念して愛宕山の旧東京放送局に開設されたのは1956年（昭和31年）3月3日のことである。今年はそれから25年、桃の節句生まれの放送博物館もそろそろ若さばかりを売物に出来ず、この辺で愛宕神社の桜にあやかって「うば桜」のあてやかさを発揮したいものである。

しかし化粧直しをしようにも先立つものがなんとやらで、思いのたけの何分かでも達成できれば幸いというのが現実である。ところで今年の2月25日（水）から3月29日（日）までの30日間開催する開館25周年特別記念展も衣裳（外見）は母親（NHK）ゆずりの着物で工夫し、内面の精神美（アイディア・企画）で勝負ということ考えた。

まずはテーマであるが、見る、聴く、触れる、放送のあゆみ半世紀」とした。触れるということは、ともに

ノースカロライナ州の「ディスカバリープレイス」、1983年に開館しようとしているカナダ・オンタリオ州北部の「サドベリー・サイエンスセンター」は、このような新しい方向性を具体化する最初のものと考えられる。

これまでの博物館の活動は、順次応答能力の高いものとなってはきたが、それはあくまで情報を送り出すためのものであった。その結果注意喚起と参加性（まきこみ型）に重点が置かれ、ややそれが過ぎた観があった。今博物館に問われているものは、このような展示の効果をバックアップする新しい情報の質であり、より広汎な社会メディアとして働く有効なシステムである。

サドベリー・サイエンスセンターの場合、組織は、原理的な知識とすべての現象をつなぎ、科学によりそれを理解しようとする「核」、サドベリー地区の種々の資源、現在働いている多くの施設を核と結びつける「ネットワーク」、更により広い地域をカバーする「環」の3つのレベルで構成されている。外部にある既存の情報を連携によってセンター内部に取りこみ、これにより交流の効果を大きくするものであり、今後の同種の機関のもつ社会的コミュニケーションセンター、社会メディアとしての性格を明確に打ち出したものと考えてよいだろう。

博物館、ことに理工系の博物館は、社会と科学技術の絶え間ない変動と進歩に伴って、絶えず新しい能力を獲得しつづけていかなければならない宿命を持っている。社会的コミュニケーションセンターとしての方向は、アプローチが始まったばかりであり、その社会的効果が待たれるところである。

（ソシアルダイナミックス研究所所長）

### N H K 放 送 博 物 館

参加する、経験するという意味である。こういう意図から特別展示コーナーでは、放送初期の一般家庭の茶の間でのラジオ聴取風景を再現した美術セットを特設したり



あっ！  
聞こえたよ

鉱石式ラジオや朝顔型スピーカー付きのラジオセットを鳴らして楽しめる「遊びの広場」を作ったりした。このほか特別展示コーナーには、注目的的のビデオ・ディスク、NHK技術研究所が開発した文字放送のセットや音場拡大装置、制作技術局のクロマキーやビデオローターなど新しい技術のコーナー、放送の初期から昭和20年代までのラジオ時代の珍しい受信機のかずかず、愛宕山時代の思い出の放送資料などのコーナーもある。また常設展示も携帯用録画装置などの機器やモスクワ・オリンピックの「幻の日本選手団」の名簿などの資料類を追加して新しい時代の歴史展示の一部補完整備をしたほか、国際放送のコーナーも刷新して色あげをはかった。

一方この特別記念展を盛り上げるために期間中土曜・日曜を中心に次のような催物を予定している。

- 3月14日「人形芝居の系譜」

話 国立劇場 西角井正大

- 3月15日「サン・トラできく映画音楽集」  
話 音楽評論家 石田 豊
- 3月21日「話芸の歴史」～落語を中心に～  
話 早大教授 興津 要
- 3月22日「放送とんち教室」  
話 元アナウンサー 青木一雄
- 3月28日「シルクロードの旅」  
話 NHKカメラマン 野口篤太郎
- 3月29日「相撲よもやま話」  
話 アナウンサー 北出清五郎

また、このほかNHK番組関連で期間中数本の録画番組や生中継番組が予定されており、3月の放送博物館は、ようやくつぼみがふくらみ始めた愛宕山の桜に先立って、まさに春たけなわといった趣がある。(来栖信夫)

## 特別展 天文・宇宙のコレクション

### 生駒山宇宙科学館

実物の無い私共天文関係の博物館で、毎年頭を痛めるのが特別展である。かといって、まったく天文・宇宙に関係のない物を集めて、特別展でございというわけにはいかず、一方、これだけ天文・宇宙関係の新しいニュースが飛びこんでくる時代に、手をこまぬいて何もしていないことも出来ず、毎年度末になると頭の前から足の先までシビレルような毎日を過ごすことになる。そんなこんなで一昨年くらいまでは、何か物があれば特別展を開催するというにしていたのであるが、昨年からは、思い切って、楽しみながら考えられるような、そして参加のできるもので特別展を考えてみよう、発想の転換を思いついた。

昨春には、特別展 太陽と遊ぼう「太陽のめぐみ」を、太陽電池・太陽熱関係の製品開発に力を入れているメーカーに呼びかけ、一方、館の費用で、ミニチュアの実験セットを数種購入し、素晴らしい太陽エネルギーについての実験講座や、クイズ(満点者には天文博士賞を出す)を行い、メーカーからの大型出品物は屋外に展示し、いつでも見られるように配置し、好評を得た。また、夏には、夏休み前の子供たちに送ると題して、移動展「科学者レオナルド・ダ・ビンチ」を開催し、秋には、特別展「むかしの暦」を開催し、子供たちと共に、昔の暦を元にした新しい現代版暦づくりをする会などを企画した。おかげで、例年を約3万5千人も上まわる入館者を得ることができた。

こうなると、今年は昨年を上まわる入館者をということになり、苦肉の策としての特別展開催計画立案ということになった。そして、ひらめいたのが「天文・宇宙の

コレクション」ということである。

要旨…玩具箱、がらくたの入った箱をひっくり返してみたら、思わぬ所に、思いがけない宝物がひそんでいるものである。その中から、世界の国々の天文・宇宙に関係のある色々なものを集めてみた。中には、もう絶対に入手できないものもある。また、これをもとに新しいアイデアを考えるものもある。大人も子供も楽しめる、天文・宇宙の何でもコレクション展である。

期間…昭和56年3月15日～6月7日

出品点数…約200点

主な出品物…宇宙服。アポロで月へ持って行ったスペース・メーター。隕鉄・隕石。世界の天文学宇宙関係の切手。世界のプラネタリウム館で出している記念品(ワッペン、置物など)。世界の色々な星座・惑星位置・月の位相・太陽高度早見盤。世界の天文・宇宙関係のコイン・紙幣。(写真)…ボイジャー撮影の木星・土星の写真。スライド。(レプリカ)…米航空宇宙局が特に製作し販売している月の石5点。

以上のように賑やかな特別展になりそうである。期間中の全天映画は、3月15日～3月31日「素晴しき地球」、4月1日～6月30日「空は生きている」を上映し、目で見ると天気予報コーナーは毎日開設して、気象衛星「ひまわり」からの雲分布ファクシミリを受信する。また、スタジオ・スペースでは、日・祝日に宇宙関係のVTR映画を放映する。

さらに宇宙科学館月例特別講座3回、望遠鏡による観望会3回も折り込み、立体的、総合的な特別展にしたい。

(濱根 洋)



空の実験がよく知られている。

展示した ML500 は、国鉄が宮崎の実験センターで実用化に向け高速走行を繰り返し行った実験車で、速く宮崎から輸送してきたものである。昭和52年7月から走行実験に供され、昭和54年12月21日に517Km/hの高速を記録し、鉄道技術史に画期的な1ページを記すこととなった。

1825年イギリスに始まる鉄道は、近代産業を支える基盤として、この150余年間不断の技術改良が行われてきたが、基本的にはレールと車輪を使った当初からの粘着推進方式で、鉄道の概念を大きく変えるものではなかつ

た。この枠を越えて ML500 が革新的技術として成功するには二つの技術の組合せが必要であった。

その磁気浮上鉄道実験車を結実させた技術は、車体を浮上させる仕組と、排接触で推進させる仕組の二つであり、原理は古くから知られていた。電磁力によるリニア運動は1891年アメリカで、そして浮上にも必要な強力な磁力を作り出す超電導現象は1911年オランダ人によって発見されたものである。この二つの科学は、現代の科学技術によって実用化され、磁気浮上式鉄道の ML500 になって開花した。いわば発見と創造が巧みに組み合わせられた科学技術の象徴ともいえよう。(木村 宏)

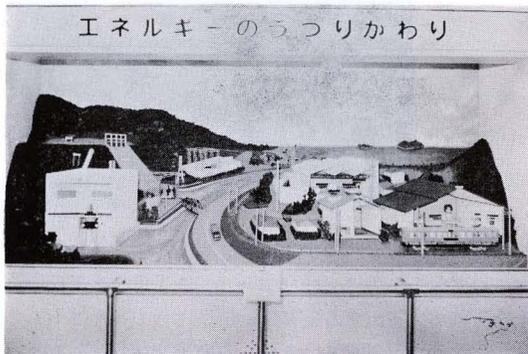
## 科学展示品「エネルギーのうつりかわり」

当館の展示のうちで比較的評判のよい「エネルギーのうつりかわり」について、製作までのいろいろな経緯、子供たちの反応について紹介したい。

まず経緯であるが、昭和49年度に科学技術館から展示品「新しいエネルギー源」の寄贈があり、3階科学展示室に展示した。この展示品は、風力、潮力、太陽熱、地熱発電の様子が一目で理解できるものである。さらに翌年、燃料電池、原子力電池、MHD発電、火力発電所模型等の展示品の寄贈があったので、エネルギーコーナーを新設することになった。そこで、従来からの懸案であった「エネルギーコーナーをいかに充実させたら良いだろうか」という問題について、昭和49年度から約3年間にわたり職員討議を重ね、エネルギー保存の法則を理解させるような展示品として「エネルギーのうつりかわり」を展示化することに決定した。昭和51年度に職員のアイデアをもとに、製作は業者に依頼した。

### 仕 様

- 展示ケース…間口2,500mm×高さ1,800×奥行1,100, 木製メラミン化粧板仕上げ、前面ガラス張り5t使用、スイッチボックス付、ケース前面手摺り取付



- 可動部……BGM装置により全工程可動方式、太陽・雨・貯水池・水圧管・発電所の排水・海の蒸発（それぞれ偏光板を使用）、発電機（タービン回転）、電車（車輪回転）、クレーン（ワイヤーが上、下動）、モーター（回転）、雷（放電実験）
- ジオラマ……ダム、発電所、水圧管、変電所、電車、工場、住宅、港湾等その他地形模型、1次変電所、2次変電所、船、変圧器等
- 電気制御装置と調光装置等は組込式

### 実 験

1. 押しボタンスイッチを押すと、貯水池から水が発電所に流れこみ、第1、2、3エネルギー変換を理解させる。
  2. 同時にテープ解説。
  3. 一定時間可動し、自動的に停止。
- 照明……スタートスイッチを押すと通常の照明から次第に暗くなり、雷光、雷鳴となり、また徐々に明るくなる。

### 子供たちの反応について

スタートスイッチを押すと全工程可動し、いろいろなエネルギーのうつりかわる順路が一目で理解でき、合わせてBGM装置によりわかりやすく解説しているので反応はたいへん良いと思う。特に家族連れで見学の場合も父兄が子供たちにいろいろと説明している姿が多く見られ、当館としても製作出来て良かったと思うし、魅力ある展示品の一つにあげられている。

今後の計画としては、「省エネ」時代といわれている昨今でもあり、太陽熱エネルギーを利用したソーラーシステム等を導入し入館者のために広く貴重なエネルギー資源問題を含め、さらにコーナー充実にも努めたいと思っている。(大柴惣寿)

会 員 館 園 の 紹 介

伊 丹 市 立 博 物 館

所在地 兵庫県伊丹市千僧1丁目1番地  
電話 (0727) 8 3-0 5 8 2

伊丹市は、兵庫県東端に大阪府と境を接して位置し、大阪国際空港をかかえる人口17万の市である。市のほぼ中央部に、市役所をはじめ消防署、裁判所、県の諸機関などの他、図書館、中央公民館といった社会教育施設も集められた行政センターがあり、当博物館もその一角につくられている。

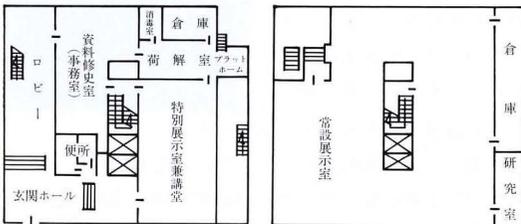
昭和33年からの伊丹廃寺跡（奈良時代の）発掘や、全7巻に及ぶ伊丹市史の編集事業などによって博物館の設立気運が高まり、自然史系を加えた県下唯一の総合博物館として、昭和47年に開館した。

地域の資料を中心とした収集・保存・調査研究活動や各種の展示普及活動を通じて、市民をはじめ多くの人びとが気軽に利用できる学習センターをめざしている。

施設と展示内容及び収蔵資料

鉄筋コンクリート造り地上2階地下2階の建物のうち、2階には389㎡の常設展示室、1階には117㎡の特別展示室（兼講堂）とロビー、事務室などがあり、地下部分は主に収蔵庫である。

常設展「伊丹の自然と歴史」では、市域の自然環境とそこでくりひろげられてきた人びとのくらしの歩みを、生物標本や出土品、古文書、民具などで紹介している。



1階 (561㎡)

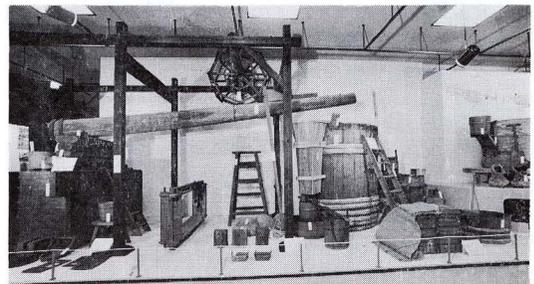
2階 (486㎡)

伊丹市域には山も海もなく、また昭和30年代以降急速に都市化が進んだため、豊かな自然環境とはいえないが、散在するため池の周辺にすむ動物や、大阪国際空港がもたらした外来植物などに特色がみられる。特に奈良時代、僧行基によって造られたと伝えられる昆陽池は、一部埋め立てられて25Km<sup>2</sup>になったが、毎冬数千羽の鴨が飛来する野鳥の楽園であり、現在市民の自然公園として整備されつつある。昭和54年には、休憩や生物観察の拠点として昆陽池センターが建設された。そこには当博物館の分室的な役割をもつ展示室も開設され、昆陽池の自然と歴史に関する資料が鳥や昆虫などの標本を中心に展示されている。



昆陽池センター展示

歴史・民俗資料で主要なものは、伊丹廃寺跡の出土品と、多数の地方<sup>じかん</sup>文書、それに酒造関係民具であろう。特に酒造り道具と、その関連産業の酒樽・桶造り道具は、江戸時代「丹醸」といわれてもはやされた天下の銘醸地伊丹を代表する民具である。このうち酒造り道具は、当館が閉館する直前に一括寄贈されたもので、洗米・蒸米・製麴・仕込み・压榨の各段階の主要道具がほぼそろっている。不足分や破損していたものは、わずかに残る職人によって製作補修された。木と竹、わら、布を用い、使い勝手の良いように工夫がこらされたこれら道具の展示場からは、今にも芳醇な酒の香がただよってくるようである。また、酒樽・桶造り道具は、同じく市内の樽職人が使用していたもので、昭和52年に兵庫県有形民俗文化財に指定された。その後奈良県の吉野から収集された樽材を造る道具を合わせ、追加指定される見通しである。



酒造り道具の展示

年 間 事 業

- (1) 展示活動……常設展のほか特別展、学習参考展などの開催
- (2) 普及活動……講演会・講座・自然観察会・移動展などの開催
- (3) 出版活動……展示解説パンフレット、伊丹市史の補遺・補正事業に伴う「伊丹資料叢書」、「地域研究いたみ」の発行 (今井美紀)

## お知らせ

## 第10回全科協博物館事業研究会

**研究テーマ** 博物館と地域社会  
**会期** 昭和56年4月21日(火)・22日(水)  
**会場** 国立科学博物館, 東京都児童会館  
**実施内容** ①博物館の近代化と管理運営上の諸問題  
 ②地方博物館の社会的地位  
 ③博物館の地域社会への対応  
 ④地方博物館の当面している諸問題  
 ⑤東京都児童会館の見学  
**対象** 全科協会員館の職員  
**参加費** 2,500円(当日, 受付で徴収)

## ポートピア'81とコンピューター工場の見学会

**期間** 昭和56年4月23日(木)・24日(金)  
**会場** 日本アイ・ビー・エム野洲工場  
 神戸ポートアイランド博覧会場  
**日程** [23日] 12時15分野洲駅前集合, 昼食,  
 博物館のファイリング・システムについて研究討議, 工場見学  
 [24日] ポートピア'81見学  
**募集** 30名(全科協会員館の職員)  
**参加費** 無料(交通費, 宿泊費は参加者負担)  
**備考** ポートピア'81の入場券は用意します。

**申込み**は, それぞれ申込書に参加者の氏名, 職名および主に分担している仕事の内容を記入のうえ, 各館園長から全科協事務局あてに申し込んでください。詳細については, 実施要綱(各会員館に送付)をご覧ください。日ごろ当面している問題をまとめ, 一人でも多く参加し, 活発に意見の交換ができることを希望します。

## 会員館園の消息

## 新入会

- 白浜ナショナルエネルギーランド(開発推進部)  
 ☎530 大阪府大阪市北区中ノ島2-3-18  
 新朝日ビル3階 松下興産株式会社  
 ☎(06) 203-0336  
 なお, 和歌山県西牟婁郡白浜町字寺谷口1566において建設が進められています。
- サンシャインプラネタリウム 館長 堀家 邦男  
 ☎170 東京都豊島区東池袋3-1-3  
 ☎(03) 989-3466
- 交通科学館 館長 三木 正  
 ☎552 大阪府大阪市港区波除3-11-10  
 ☎(06) 581-5771  
 (維持会員)
- 三和アドバタイジング 株式会社三和通信社  
 取締役社長 松井 敏明  
 ☎103 東京都中央区八重洲2-6-7  
 ☎(03) 281-1051

## 科学博物館への招待について

全科協の編集により昨年6月に刊行された「科学博物館への招待」(東海大学出版会, 1,000円)は, 会員館に委託販売をお願いしていますが, すでに販売済みの代金について整理の都合上5月20日まで御送金ください。

なお, 会員館の職員で購入御希望の方には, 引き続き1冊850円でお送りしますので, お申し込み願います。  
 (全科協事務局)

## Museums In Japan 刊行される

博物館を見学したいという海外からの来訪者が増えつつあり, かねてから英語による日本各地の博物館の紹介書が要望されていた。このたびイコム日本委員会編集によって刊行された“Museums In Japan”は博物館関係者にとどまらず日本を訪れる外国人観光客あるいは海外への紹介書としても適書と思われるので紹介したい。

本書は, A5判約300ページで, 主な内容は, 1ページ当たり1博物館の割合で, 240館の利用案内, 展示資料, 所蔵資料, 教育活動等が詳細に説明されている。巻末には, さらに167館について, 所在地, 電話番号, 館種が掲載されている。

本書の価格は1冊3,800円(送料300円)であるが, 御希望の方は直接イコム日本委員会へお申し込みいただきたい。

- ☎103 東京都中央区日本橋茅場町1-10-1  
 日本博物館協会内  
 ☎(03) 669-2221

## あとがき

○今回も原稿がそろわず, 発行が遅れてしまいました。  
 ○館長の交替等の人事異動, その他会員館園に流したいニュース等がありましたら御一報ください。

